

150 年前に伊達市を作った侍たち

伊達市教育委員会生涯学習課文化財係 学芸員 伊達元成

1. はじめに

北海道伊達市は明治3年に、仙台藩亙理伊達家によって開拓されたまちです。その都市計画は武士らによって行われたので、道路や宅地の地割りは城下町のつくりになっています。たとえば容易に敵が侵攻できないように複雑な道路になっていることや、城郭作りを物語る土塁が現存しています。なぜこのような町並みにしたのか、少し歴史を遡ってみましょう。



写真1.伊達邦成（明治初期）

2. 北海道を目指したその背景

亙理伊達家は伊達宗家第14代当主伊達植宗の子・実元を家祖とし、その子の成実が慶長7年12月に亙理郡亙理城主となったのが始まりで、江戸時代を通じて家中最大の24,385石を領していました。そして幕末を迎えるまで、亙理の地を治めていました。北海道に移住してきたのは、第15代当主・邦成の時代で、戊辰戦争の敗北にともない所領を失うと家中を率いて北海道に移住して現在の伊達市を開拓しました。

この移住計画については、いくつかの背景がありました。

(1) ロシアの南下に備えよ

江戸時代から蝦夷地沿岸にはしばしば外国船が現れていました。特にロシアの侵攻には目を光らせており、蝦夷地では東北諸藩に沿岸警備を命じる他、蝦夷三官寺を設置するなどの対策が取られていました。

(2) 亙理伊達家の厳封と領地の半減

戊辰戦争の戦後処分により、亙理伊達家の領地は半分が南部領に編入されてしまいます。それは、領地領民を養う経営が事実上不可能になったことと、南部藩の農民になるか、流浪するか屈辱的な選択肢しかありませんでした。

(3) 新政府の北海道開拓事業

新政府は領土問題も含めた北方警備と、食糧増産を兼ね

た北海道開拓計画を進めます。新政府としては、「失業武士」問題を解決する方策として、全国から北海道開拓の希望者を募り、これに当てました。

邦成たちは、このような政府の方針に寄り添う形で、独自の北海道開拓計画を進めました。しかし、邦成らの開拓の方法は、政府の募集に手を上げるのではなく、「何もかも自費で開拓を行う」というものでした。そして家臣ら2,700名を率いて、戊辰戦争の汚名返上に邁進したのです。

3. 進取の気性 その根源は

明治3年から始まった北海道有珠郡への入植と開拓は、ゼロからの町作りでした。一方で新型の西洋式農機具の導入や、ビートの栽培と製糖工場の設立など、矢継ぎ早に新事業を展開しました。

これまで、武士というのは古い考え方を引き継ぎやすいと思われておりましたが、伊達武士団の姿をみると、常に新しいことを計画し、そしてその実現のために行動する姿が見えます。そういったバイタリティを育んだのは、「教養の高さ」ではないかと指摘されています。

亙理にいたときも、日就館という藩校で家臣らは教養を身につけていました。北海道に渡っても、真っ先に寺子屋を建てて、開拓と同時に教育にも力を入れていました。このような姿を見ていると、いつの世も教養が大切であると現代の私たちに語りかけているように思えます。

3. だて歴史文化ミュージアムの開館

平成31年4月3日に「だて歴史文化ミュージアム」が開館します。これは伊達市の歴史と文化を多くの人に知ってもらう学びの施設です。道の駅「だて歴史の杜」に接しているため、アクセスもよい場所です。先史時代の伊達市の姿から、ユニークな亙理伊達家中の歴史を紹介しますので、ぜひお越しください。



写真2.だて歴史文化ミュージアム外観